年収150万円で暮らす法 ⑰

吉田　清彦

義理は欠くべし

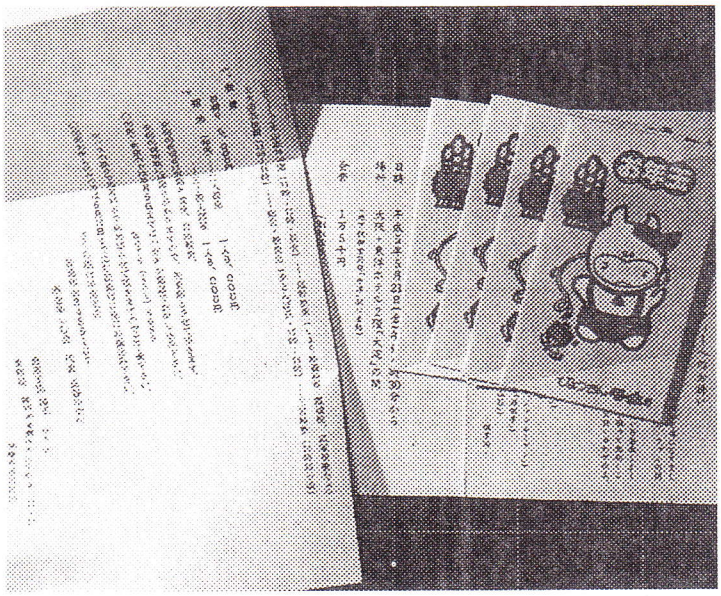
中元の時節である。わが家にも取材先などから贈られてくることがあるが、こちらから贈ることはない。歳暮もまた然（しか）りである。

新聞などによると、世間一般では、両親や兄弟、親戚（せき）などに四件、仕事関係で二件、合わせて三万円近くを中元に使うらしい。おそらく歳暮だと、もっと多くになるのだろうが、こういうものは本当に必要なものだろうか。

同じようなものに冠婚葬祭費、慶弔金というのがある。総務庁の調査では冠婚葬祭費の全世帯平均は年間四万五千円弱だが、民間のある調査によると、東京・大阪・名古屋に住むサラリーマンの昨年一年間の慶弔金の平均出費額は十八万六千三百円にも上っている。

時折、思い出したように「虚礼廃止」の掛け声が聞かれることもあるが、そこは何かと〝村〟型の〝系列〟社会上は政治家から下は一般庶民にいたるまで、〝日頃（ごろ）の付き合い〟は欠かせぬものらしい。

私だって、一応、飲食業界の片隅に籍を置き、ましてやフリーランスの身の上、中元・歳暮は別として、日頃の付き合いをおろそかにすると、入ってくる仕事も入ってこなくなると、パーティーやらレセプションなどにこまめに顔を出していた時期もあった。



付き合いを少なく

ところが、このパーティー参加費、七～八年前までは一人三千円とか五千円とかのつつましやかなものが多かったように記憶するが、〝バブル〟の時代を経て、今時は軒並みに一万円を超えるようになってきている。こうなると、そう気軽に付き合っているわけにはいかなくなる。

それに、事務所を構えて従業員を抱えているのならともかく、人ひとり食っていくだけなら、別段これ以上仕事を増やしていく必要もないし、少しくらい減ってもなんとかなる。

そう考えるようにして数年前からパーティーとかレセプションのたぐいは一切出ないようにしている。

仕事がらみ以外の、いわゆる親類・縁者との付き合いとなると、私はもともと興味が薄い。それは、もともと親類・縁者との付き合いがあまり好きではないということもあるが、そこに物や金銭がからむということを特に嫌ってきた。

貧乏人のヒガミかも知れないが、金銭がからむと人間どうしても卑屈になったり、見栄を張ったりする。そういうものからできるだけ自由でいたい。

幸いに私は一人者なので、いわゆる〝世間体〟をあまり気にせずにすむ。昔からよく「一人口は食えなくても、二人口は食える」と言うが、私の実感としては、明らかに一人口の方が生活費は少なくてすむ。

というのも、〝結婚〟していると、自分の親・兄弟やら相手の親・兄弟やらへの見栄が幾重にもからんで、中元・歳暮や冠婚葬祭にかかわる交際費が随分高くつくからである。

その点私は、親類・縁者に対する交際費といえば、年に一―二度上京の折に数日世話になる弟の家の子ども二人へのお年玉くらいである。それも、数年前までは、それぞれに千円程度の本を買い与えて済ませていたのだが、中学、高校生ともなると、そういうゴマカシは今やきかなくなってしまった。（フリーライター）

前の丑年に銀行でもらったポチ袋がめいのお気に入り。年に2袋使う中身が唯一の交際費。よく届く出版パーティーなどの案内にはほとんど失礼する